

爽やかDD太一くんのスケベファン ド 下のサンプル

著者 金目

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

御堂太一（みどう たいち）

20 歳。男。大学生。

父親の御堂恵一郎が恩師の甥の借金の連帯保証人となり、1 億 8000 万円の負債を背負ったことから、スケベファン্ডに手を出してしまう。

平常時 12.9センチ、勃起時 28.5センチのグロ魔羅。

香月智雄（こうづき ともお）

58 歳。男。大学教授。太一の指導教官。

父親の負債を理由に退学しようとする太一にスケベファン্ডを紹介し、手厚く支援をする。

御堂恵一郎（みどう けいいちろう）

56 歳。男。ガラス工芸職人。

御堂太一の父親。恩師の甥の借金の連帯保証人となったことで1 億 8000 万円の負債を背負ってしまう。

大隅（おおすみ）

21 歳。男。大学生。

御堂太一がスケベファン্ডを始めたと知り、辱めるために積極的に支援をするようになる。

上巻あらすじ

爽やかな顔が取り柄の男子大学生、御堂太一は父親の恵一郎が連帯保証人となったことで背負わされた借金1億8000万円を返済する手伝いをするために、大学を退学して就職する決意を固めていた。

そんな太一に香月教授は、「支援のお礼としてスケベを提供する」スケベファン্ডへの登録を勧めてきた。

悩んだ末に、普通に就職するより稼げることからスケベファン্ডに登録した太一は、支援のお礼として、公共の場での全裸など、様々なスケベを提供し、羞恥に苦しんだ。

それでも思うように集まらぬ支援金を集めるため、太一は己の平凡ペニスと決別をし、巨根になるために、ペニス増強剤の投薬を受け入れた。

第四話 射精動画撮影

御堂太一（みどう たいち）は緊張していた。

支援のお礼としてスケベを提供するスケベファン্ডに登録した太一は、支援金を得るために、公共の場で全裸を晒したり、裸踊りをしたり、電車内で射精させられたりしてきた。

大金を欲したのは、己のためではない。

父親の恵一郎が恩師の甥の借金の連帯保証人となり、1億8000万円の借金を背負わされたためだ。

太一は、その借金を返済する手助けをするために、スケベファン্ডで身売りをすることを受け入れた。

けれど、それは太一から常識や良識、羞恥心が失われたことを意味してはいない。

だから、太一はスケベファン্ডの支援御礼として全裸になったり、他人の手で手コキされたりするたびに、羞恥心に苛まれた。

今もそうだ。

太一はまだ服を着ているにもかかわらず、緊張していた。

ここは太一の指導教官である香月教授のマンションの一室だ。

大学の指導教官の自宅に招かれる。

ゼミの学生が全員で、というのならばよくあることだろう。

けれど、教授と学生が二人きりというのは、昨今のモラルの問題を考えれば問題視されても仕方がない事だ。

しかも、部屋に招かれた目的は不順なのだ。

香月は、部屋に置かれた七台のカメラの具合を確認している。

これから、太一は香月に撮影されるのだ。

御堂太一のスケベファン্ডへの投稿動画として、太一が射精する姿を。

己の最も恥ずかしい姿であるオナニーを、無修正で配信するために指導教官である香月

に撮影されるのだ。

オナニーを撮影されること自体耐えがたいというのに、指導教官である香月に撮影されるということが、太一の常識と良識を真っ向から踏みにじる行為であった。

けれど、仕方がなかった。

平凡ペニスと決別し、平常時 12.9 センチ、勃起時 28.5 センチのグロ魔羅を手に入れた太一は、自らが選択した通り、支援者を増やすことに成功した。

けれど、太一の目標額は 1 億 8000 万円。

とてもではないが、まだまだ足りないのだ。

だから、スケベファンドの新事業である動画配信に参加をしてはどうか、と香月に勧められたときは悩んだ。

支援金は欲しい。

父親のために一円でも多く欲しい。

けれど、そのために己の痴態をネット配信するというのは抵抗しかなかった。

ネットに動画を流せば、一生、その汚名が付いて回ることをよく理解していたからだ。

それでも、最終的に太一は父親の助けとなることを選んだ。

そして、香月の部屋に招かれ、オナニーを撮影してもらおうとしている。

はしたない。

太一は己をそう卑下した。

お金のために身売りをするなんて、家族が知ったら軽蔑されるに決まっている。

それでも、たとえ軽蔑されても、太一は 1 億 8000 万円の借金を返済する助けとなりたかった。

だから、太一は香月の部屋にいる。

「では、撮影を始めよう。

服を脱ぎたまえ、御堂くん」

「分かりました、香月教授」

香月の言葉に頷くと、太一は、己のはしたない姿を撮影してもらうために服を脱ぎ始めた。

香月が構えるハンディカメラと六台の固定カメラの前で青のボクサーパンツ一枚となった太一は、唯一の取り柄である爽やかな顔を羞恥の赤に染めていた。

香月や、太一に歪んだ情念を向ける大隅、そして、名前も分からないスケベファンドの支援者たちが口々に認めるだけあり、太一の顔立ちの爽やかさは目を引くものがあつた。

太一の身体つきもまた、爽やかさに溢れ、男臭さではなく、イケメンらしさに満ちていた。

アスリート体型と呼ぶには細いが、程よく筋肉のついた身体は手入れをしていないにもかかわらず、体毛が薄いため、柑橘系の香りがしそうな爽やかさを発散している。

生物学上の雄ではなく、少女漫画の男、と呼んだ方が適切かもしれない。

だが、青のボクサーパンツに包まれた股間の存在感が、そうした爽やかさに大きな傷をつけていた。

太一の青のボクサーパンツは、生地が薄くなりそうなほどに盛り上がっていた。

平常時で 12.9 センチとなったグロ魔羅を押し込めているためだ。

斜めに押し込められた陰茎の太さと長さや、雁首の張った大きなずる剥け亀頭、人並外れた金玉がくっきりと浮かんでいる太一の股間は、ゲイ雑誌の巨根特集に出ても違和感のない男臭さに溢れた逸物であった。

側面から見れば、成人男性の握りこぶしよりも大きな膨らみがボクサーパンツを押し上げていることがよく分かるだろう。

爽やかさしか取り柄のなかった太一の股間に鎮座するボクサーパンツの上からでも存在感を主張する男臭さの権化であるグロ魔羅。

少女漫画の男性にゲイ漫画のチンポをコラージュしたかのような、相反する雰囲気を用意したのが今の太一の姿であった。

スケベファンで支援者を募っている太一には幸運なことに、そして、未だに常識と良識を捨てられない太一には不幸なことに、少女漫画のような肉体とゲイ雑誌の男性器という矛盾を備えた太一の肉体は、それらの要素が互いを高め合い、屈服させるべき獲物としての太一の価値を大きく高めていた。

「では御堂くん、ボクサーパンツをゆっくりと下しなさい」

「分かりました」

香月の指示に従い、太一はゆっくりとボクサーパンツを下ろしていく。

腰骨がうっすらと浮かぶ腰が露わになる。

続いて、爽やか系の肉体に相応しく、グロ魔羅を彩るには役不足の薄めのチン毛が見えてくる。

ゴムが引っかかるため、太一は親指でボクサーパンツのゴムを前方に押しながらさらにボクサーパンツを下ろしていく。

ぶるるん！

大げさな擬音をつけても許されるに違いない太一のグロ魔羅が窮屈なボクサーパンツから解放され、前後に揺れた。

かつては仮性包茎で、平常時は亀頭を覆っていた包皮は雁首が大きく発達した亀頭の根元に押し留められ、完全に剥けていた。

童貞らしい清潔感溢れるピンク色だった亀頭は、煮え立つ情欲の赤に染まっていた。

陰茎は血管が脈打ち、男性機能が十分に備わっていることを如実に示しており、その長さは短小ペニスのフル勃起以上であった。

かつては常人並の金玉は、鶏卵サイズにまで大きくなり、その精力の奔放さを示している。

まさに、男の夢を煮詰めたかのようなグロ魔羅が爽やか系男子大学生の太一の股間にぶら下がっていた。

「では、全身を撮影しよう」

香月がハンディカメラで太一の顔からゆっくりと全身を撮影していく。

喉仏。胸筋。うっすらと形の分かる腹筋に綺麗なへそ。

そして、下腹部に注視していた香月のハンディカメラの動きが止まった。

「おや？」

香月が何かに気が付いた様子を見せた。

太一は、その様子に心臓が縮みあがった。

太一のグロ魔羅にはある秘密があるのだ。

香月がそれに気が付いたのだ。

「御堂くん、見てみたまえ」

香月がハンディカメラのモニターを太一に向けた。

太一は、香月が何をみせようとしているのかを悟り、顔が赤くなった。

ハンディカメラのモニターに斜めに映りこんでいる太一の雁高の亀頭と包皮の間に、くっきりと白いラインが浮かんでいた。

修正ではない。

生の映像なのだ。

「チンカスだね。

御堂くんは、昨晚、シャワーを浴びた後にオナニーをしたのかい？

今日、オナニーを撮影する日だというのに？」

「いいえ、違います。

教授の指示通り、昨晚は禁欲をしました」

香月の言葉を太一は否定した。

ペニス増強剤の影響で金玉が大きくなって以来、太一は毎日オナニーをせずにはいられない身体になってしまった。

元々、性欲が薄く、オナニーを毎日する必要がなかった太一にとって、この変化は性欲に負けたようで屈辱的なものであった。

「では、シャワーを浴びなかったのかい？

でなければ、チンカスがこんなに溜まるはずがないだろうに」

香月がハンディカメラのモニターに映った太一のチンカスラインを指でなぞりながら詰問を続ける。

「いいえ、シャワーは浴びました。

今朝も浴びました」

太一は香月の言葉を重ねて否定した。

「それならば、どうしてこんなにチンカスが溜まっているのかな」

香月がわざとらしく鼻を鳴らした。

「ああ、チンカスの臭いがするね。

御堂くんはチンカスの臭いをプンプンさせたいのかな」

「そんなつもりはありません」

香月の顰るような言葉に太一は羞恥心がチクチクと刺激される一方であった。

「では、説明したまえ。

このチンカスはどういうことなのかな？」

香月が太一の顔にハンディカメラをに向けた。

太一の答えも配信動画の一部として流すつもりなのだろう。

己の下半身事情を不特定多数の人間に知られてしまうことへの抵抗で太一の心臓がぎゅっと縮まった。

だが……

太一の脳裏にガラス工芸職人である父、恵一郎の顔が浮かんだ。

そうだ、これは父のためなのだ。

だから、耐えなければならないのだ。

「ペニス増強剤の投薬が終わってから、シャワーを浴びて就寝しても、翌朝にはチンカスがくっつき溜まるんです。

だから、今朝はチンカスが映らないように家を出る前にシャワーを浴びたのですが、こんなになるとは思いませんでした」

太一は顔を赤くしながら、チンカスが活発に出てくる己のグロ魔羅について説明をした。「そうかそうか。

まあ、気にすることはない」

香月がにやりと笑った。

「御堂くんのグロ魔羅では、もはや、女の子はおろか、男性でさえ受け入れることを嫌がるだろう。

私もまだ、実物は見えていないが、勃起時 28.5 センチのグロ魔羅を挿入しようとすることは、人類への冒涇に違いないからね。

挿入不可能なグロ魔羅がチンカス塗れだろうと、そもそも受け入れる相手がいないのだから気にするだけ無駄、ということだね」

香月の言葉に太一は惨めになった。

スケベファンで色んな相手に辱められてきた太一ではあるが、性的認識ではノーマルでノンケだ。

だから、女性とのセックスへの夢は捨ててきていないし、香月が示唆した男とのセックスへの興味などない。

だから、お前の魔羅は一生実用できない、と香月に嘲笑われて太一が惨めにならないはずがないのだ。

「ああ、そういえば、一つ、よいことがあるじゃないか」

香月が太一の顔にハンディカメラを向けた。

「君のグロ魔羅、勝手に勃起しなくなったじゃないか。

これで、露出狂の汚名を雪げるというものだよ。

喜びなさい」

かつての太一の平凡ペニスは、裸体を晒すと勝手に勃起するはしたないペニスであった。

だから、全裸になっても勝手に勃起しなくなったということは、確かに喜ばしい事だ。

その代償が、一生挿入不可能と揶揄されるグロ魔羅でさえなければ……

「……嬉しいです」

だから、太一は己の心押し殺して、嬉しい、と呟いた。

ところが、香月がハンディカメラを下ろし、ため息をついた。

「駄目じゃないか、御堂くん」

香月が首を振った。

「いいかい、君に求められている発言は、大きすぎて挿入不可能なグロ魔羅を得たことを視聴者の皆様に実感させる台詞なんだよ？

君も、スケベファン初心者ではないのだから、もっと、淫らな言葉を口にする習慣を身につけなさい。

ほら、もう一度」

香月が再びカメラを向けた。

これは、香月が納得できる言葉を見出すまで、繰り返しやり直しを要求される流れだ。

太一は必死に考えた。

過去のスケベファン্ড支援者に言われた淫語を必死に思い出しながら言うべき言葉を考える。

「勝手に勃起する俺のはしたない平凡ペニスが、一生挿入不可能なほどのグロ魔羅になるまでご支援いただいたおかげで、誤作動をしなくなりました。

生涯童貞確定ですが、いつか処女アナルを征服される日を楽しみに、皆様のご支援を待っています」

「……まあ、いいでしょう。

御堂くんの魅力はその、一歩間違えばあざとさしかない初心なところですからね」

香月が納得した様子を見せたので、太一はほっとした。

今の言葉は、太一が考え得る最悪に惨めな言葉だったからだ。

「では、オナニー撮影に入りましょう。

喘ぎ声を我慢せずに、声だけで男をイカせるつもりで、娼婦のようにオナニーをきなさい」

「分かりました」

香月の言葉に太一は頷いた。

そして、六台の固定カメラと香月のハンディカメラに見つめられながら、部屋の中央に置かれたベッドに腰を下ろし、グロ魔羅を扱き始めた。

「ふぐう、ふあう、ああああ」

太一は意識して喘ぎ声を発した。

普段、太一はオナニーをするとき、声を殺している。

太一は実家から学校に通っていた頃に精通をしたのだが、実家には太一の個室はなかった。

だから、オナニーをする場所はお風呂、トイレなのだが、トイレで喘げば近くを通りかかった家族に聞かれてしまう。

そうした生活環境の中で、太一は声を殺してオナニーをする習慣を身に着けた。

大学進学を機に独り暮らしを始め、大きくなった金玉の影響で毎日オナニーをせずにはいられなくなった現在でも、アパートのトイレで声を殺してオナニーをしている。

だから、声を出してオナニーをすることは、太一にとって、路上でオナニーをしているかのような恥ずかしさがあった。

オナニーをしていますと宣伝しているようで、恥ずかしかったのだ。

だが、その恥ずかしさは太一の快樂の炎に油を注いだ。

アパートのトイレで声を殺してオナニーをしているときに比べて、背中がぞくぞくするような快樂が襲い、まるで、精通直後の手コキをするだけで泣きそうになるほどの快樂に襲われているのだ。

平常時でさえ、威容を誇っていた太一のグロ魔羅は、勃起することでその本領を発揮していた。

亀頭は完全に傘を開き、雁首の逞しさがこれでもかというほどに伝わってくる。

そのような亀頭を支える陰茎も幼児の腕ほどの太さになり、血管がグロテスクに這いまわっている。

金玉も陰茎の根元に引きあげられ、玉袋越しにその大きさを誇っている。

そんな太一のグロ魔羅全体がぬらぬらと淫靡な艶を放っている。

鈴口からとぷとぷと流れ続ける我慢汁が太一の手コキによって、グロ魔羅全体に馴染んでいるためだ。

「んふう、お、おあっ、おおう」

見られていると思えば思うほどに、恥ずかしいと思えば思うほどに、太一は昂り、全身を快楽に揺さぶられる。

出そうと意識していた喘ぎ声も、いつの間にか自然に溢れ出していた。

六台の固定カメラと香月のハンディカメラを通じて、何十人もの見知らぬ男たちに見られているのかと思うと、恐ろしいことのはずなのに、腰の奥がぎゅんぎゅんとして、快楽が高まる一方なのだ。

太一の肉体は新たな快楽に従順であった。

全身を火照らせ、うっすらと汗を流し、太一の爽やかな肉体に仄かな淫靡さを添える。

それは、見る者を誘惑し、凌辱へといざなう魔性の先触れであった。

爽やかなだけであった太一の肉体は、不釣り合いなグロ魔羅を得ることで、独特の魅力を手に入れたのだ。

スケベファンドによって支援者を集め、支援金を集めるという目的には適った変化だと言える。

けれど、太一の心は、見られることで昂る己に困惑していた。

己の口から喘ぎ声が滔々と零れることに戸惑った。

トイレで一人、オナニーをしているときよりも興奮している事実が恐ろしかった。

何より、見られていることへの抵抗が己の中から消えつつあることがおぞましかった。

けれど、太一の手は止まることはない。

長大なグロ魔羅を雁首から根元まで何度も往復する。

そのたびに、塗り込められる我慢汁と、雁首に溜まっていたチンカスのせいで、太一のグロ魔羅は淫靡さを増していく。

その大きさゆえに生涯童貞を定められた無用の長物が、ありもしない実戦のために身支度を整える様は、男の征服欲を煽る上質なスパイスであった。

そのことは、撮影者である香月のズボンの股間が膨らみ始めたことから明らかであった。

己の身体の変化に戸惑う太一は、香月の股間の変化に気が付いていない。

ただただ、快楽に溺れつつある己のことしか太一は考えられない。

「おおおう、おおう、おあああ」

太一はベッドの上で腰をくねらせ始めた。

淫らさを増す快楽を前にして、じっとしていることが不可能になったのだ。

ベッドのシーツが、太一の腰の動きに合わせて欲情の波を形作っていく。

スリムな肉体が扇情的に蠢き、唾を飲み込む喉仏の動きでさえ、男を手招く淫らさを露わ

にする。

爽やかな太一の顔は、欲情に歪みだした。

目がとろんとし、目尻から涙が零れている。

口は、喘ぎ声に震えて、時々、唾をごくりと飲み込んでいる。

額には汗で前髪が張り付いている。

今の太一は、グロ魔羅がもたらす快楽に振り回されているようにしか、香月には見えなかった。

そして、その印象が正しい事は、太一の表情を見れば明らかであった。

香月がそんな太一の蠱惑的な表情をハンディカメラに捉える。

快楽に溺れる太一の顔は、快楽に戸惑う処女の初々しさと、快楽を享受する娼婦の食欲さがマーブル模様のように渦を巻き、見る時々でその表情を扇情的に変化させていた。

六台の固定カメラも、各々の角度から太一の浅ましい身悶えを録画している。

これらを編集する間、オナニーをせずにいるのは無理だろう、と香月は感じた。

太一の中に眠る男を惑わす魔性が、皮肉にも男臭さの権化であるグロ魔羅によって開花しつつあるのを香月は己のペニスで痛いほどに感じていた。

今の太一ならば、スケベファンで劣情を満たす多くの男たちを乱し、惑わせるだろう。

そして、太一の望み通り、多くの支援金が太一の元に来るだろう。

今はまだ、香月は太一の筆頭支援者であることができる。

けれど、そのうち、その座も危ぶまれるようになるだろう、という予感が香月を襲った。

今の太一は、香月の最良目を抜いても、それほどの淫らさを備えているのだ。

だが、今は、今だけは、太一は香月だけの太一だ。

だから、香月は視線だけで太一を眺めるように、ハンディカメラ越しに太一を見つめ続ける。

「はああ、ああ、ううううう」

香月の劣情に気が付く余裕もない太一が、ねっとり糸を引くような喘ぎ声を漏らしながら香月を、いや、太一を見る男全てを誘惑している。

「あああ、いきそう、いくう、うあああああああ」

太一がグロ魔羅から手を離れた。

気持ちよすぎて抜くことさえできなくなったのだろう。

太一がベッドの上に両手をついて、腰を突き出し、フル勃起したグロ魔羅をカメラの前に見せつける。

発情した犬のように小刻みに息を吐く太一は前後に腰を動かしている。

その動きに合わせてグロ魔羅がぶるんぶるんと震えている。

「ううっ！ おほっ！ うはああ！」

太一がビクンビクンと腰を動かす。

太一の腰の奥からねっとりとした劣情が噴き上がる。

太一は、訪れない射精に顔を歪めた。

平凡ペニスだった頃に比べて、太一のグロ魔羅はフル勃起状態で二倍以上の長さになっている。

だから、生涯童貞汁が鈴口から放たれるまでの時間も倍近くになっているのだが、太一の

身体がその現実はまだ慣れていないのだ。

だからこそ、太一は精通したての少年のように己の快楽に戸惑う。

出るはずの生涯童貞汁がまだ尿道を競り上がっている最中だということに耐えきれずに喘いでいる。

「おあ、あ、イけたあああああ」

太一が思いっきり腰を突き上げた。

香月は太一の亀頭をハンディカメラに収める。

ぷっくりと太一の鈴口から濃厚な生涯童貞汁が膨れ、そして、炸裂した。

糸を引き、空中に飛びあがった生涯童貞汁を追いかけるように、次の生涯童貞汁が鈴口から噴き上がる。

噴き上がった生涯童貞汁が空中に放物線を描いて、それから徐々に速度を増しながら落下し、太一の胸板にべちょりと張り付く。

次々と放たれた生涯童貞汁が太一の腹筋や太もも、ベッドのシーツに染みを残していく。

「はあ、はあ、はあ……」

射精を終えた太一が情欲の余韻を醒ますかのように呼吸を繰り返す。

その呼吸に合わせて収縮を繰り返す腹筋についての生涯童貞汁がぬとぬと流れ落ちる。

太一が射精の余韻で潤んだ目を香月に向ける。

「一杯出せたね、御堂くん」

香月が太一の腹筋についての生涯童貞汁にハンディカメラを向けている。

その視線は太一に、己の公開オナニーという屈辱的な事実を強く認識させた。

太一は、本能的に服を欲した。

射精を済ませて常識と良識が戻った身体が、当然の要求として衣服を着て、不躰な視線から裸体を隠したい、と思ったのだ。

けれど、まだ終わりではない。

事前の打ち合わせでは、手コキだけで終わりではないのだ。

「では、次の撮影に入ろう」

香月が太一にオナホールを手渡した。

次は、オナホールを使ったオナニーの撮影なのだ。

太一は、カメラの向こうに男たちの情欲を感じながら、己の手でグロ魔羅を勃起させた。

グロ魔羅が痛いほどに勃起していることを確認してから、太一は香月から渡されたオナホールを手を持った。

実際に使ったことはないが、男として太一はその使い方を察した。

穴にペニスを通して扱きたてることで快楽を得るのだ。

太一は、グロ魔羅の亀頭にオナホールを押し込んだ。

ぬるぬるとした内壁が太一のバンバン亀頭を優しく包み込む。

手コキしか知らなかった太一にとっては、甘美な快楽であった。

もっと……もっと欲しい……

太一は、更なる快楽を求めて、ゆっくりとオナホールを押し込んでいく。

根元まで押し込めば、どんなに気持ちよくなれるのかという好奇心が、オナニー動画を撮影していることへの羞恥心を押し殺していく。

だが、太一の欲求は叶わなかった。

亀頭の半分ほどまで押し込んだところで、つかえたのだ。

太一は力んだ。

快樂のために、オナホールをグロ魔羅で貫通させようとした。

けれど、何度押し込もうとしても亀頭はそれ以上中に入らない。

立派な雁首がつかえて、オナホールへの挿入ができないのだ。

「おやおや、御堂くん。

まさか、オナホールの使い方が分からないのかな」

香月がハンディカメラを構えたまま、太一に問いかける。

「いえ、それが……」

太一はカメラに向かって今の状況を説明することが恥ずかしかった。

亀頭がつかえて、オナホールに挿入できないなどと言えなかったのだ。

「では、早くオナホールでオナニーをきなさい」

「……すみません。入りません」

香月に急かされた太一は、仕方なく正直に話すことにした。

「何が入らないのかな？」

だが香月は、太一が何を言わんとしているのかを察したうえで、太一を更に問い詰める。

「亀頭が引っかかって、オナホールに入りません」

太一が正直に告白をすると、香月が「おやおや」と苦笑いを浮かべた。

「今日のオナニー動画撮影は、手コキ、オナホール、床オナの三本立てだというのに、困ったねえ」

「すみません。

もう一回り大きいサイズはありませんか？」

太一はオナホールへの好奇心から、香月にねだってしまった。

「御堂くんは、オナホールが欲しいのかい？」

「……はい」

香月の言葉に太一は恥を堪えて頷いた。

オナニー動画撮影が決定事項である以上、気持ちよいことを優先しても問題ないだろう、と悪魔が囁いたためだ。

「だが、このオナホールは国内向けに生産されているものでは最も大きいんだけどね」

香月の言葉は真実であった。

オナホールに詳しい者が見れば、それは明らかなことであった。

太一に手渡されたオナホールは国内向けに生産されているオナホールの中では最も大きいLLLサイズであった。

「つまり、このオナホールが入らない御堂くんは、一生、オナホール童貞すら卒業できないというわけだね。

仕方ないね、大きすぎるのだから」

香月の言葉に太一は、己のグロ魔羅が大きすぎるという事実を叩きつけられ、女性器の代

用品であるオナホールすら使えない己に泣きたくなった。

「そんな顔をする前に、動画を閲覧する皆様に謝罪をください。

グロ魔羅が大きすぎて生涯オナホ童貞のヘン・タイチを許してください、とね」

香月がハンディカメラを向けて、太一に屈辱的な言葉を要求する。

亀頭の半分だけで味わったオナホールの甘美な快樂への未練と、香月が要求する言葉への抵抗で太一は何も言えなかった。

「どうしたのかな？」

けれど、香月は太一への容赦などまったくしなかった。

これは、言わなければならないのだ。

言うしかないのだ。

「グロ魔羅が大きすぎて生涯オナホ童貞のヘン・タイチを許してください」

口にした途端、恥ずかしさで太一は胸の奥がざわざわとした。

「では、代わりにオナニーを用意するとしよう」

香月がハンディカメラをテーブルに置くと、寝室の隅に置かれた棚から何かを取り出す仕草を見せた。

戻ってきた香月の手には、細長い棒のようなものが二本握られている。

「なんですか、それは」

太一が尋ねると、香月がにやりと笑った。

「これは、乳首を簡単に性感帯として目覚めさせる注射だ。

御堂くん、君にはチクニー、と言っても分からないか、乳首でオナニーをして貰う。

こんなに男らしいグロ魔羅をぶら下げておいて、女の子みたいに乳首でドピュドピュ射精をするなんて、惨めだよね」

香月の言葉に、太一は身体が震えた。

想像しただけで、情けなくなったのだ。

太一は男だ。

スケベファンで身売りをしている今でもその認識に変わりはない。

だから、男である己が乳首でオナニーをするだなんて、想像しただけで去勢されてしまったようで惨めになったのだ。

「そんな顔をして、どうしたんだい？」

仕方がないだろう。

世界中を探しても、御堂くんのグロ魔羅に見合うオナホールは存在しないのだから」

香月のその言葉は嘘であった。

国内向けには、確かに太一のグロ魔羅に見合うオナホールは存在しない。

けれど世界という枠で見れば、太一のグロ魔羅が世界で最大のペニスではないし、探せば太一のグロ魔羅に見合うオナホールも見つかるだろう。

けれど、香月は真実を告げなかった。

その方が、太一を追い詰められるからだ。

「分かったようだね」

香月が笑みを浮かべた。

その笑みが太一には肉食獣の舌なめずりのように見えた。

けれど、拒むことはできない。
オナニー動画を撮影すると太一は決めたのだから。

「お願いします」

だから太一は香月に頭を下げた。

「任せたまえ」

香月が注射器を持って太一に近づいてきた。

注射自体はすぐに終わった。

太一は、軽く針で差されたかのような痛みを感じたがそれだけであった。

「では、摘まんでみたまえ」

香月に促され、太一は恐る恐る己の両の乳首に両手を近づけた。

人差し指で軽くなぞると、ぞわぞわと腰の奥が蠢いた。

信じられない。

注射をされただけだというのに、太一の乳首はまるで性転換をしたかのように過敏になったのだ。

太一はもう一度、乳首を撫でた。

雁首をなぞられているかのような気持ちよさともどかしさが太一を襲う。

「どうしたのかな？」

早く摘まんでみたまえ」

香月が太一に、乳首を摘まむよう促す。

太一は恐ろしくなった。

指でなぞっただけで、こんな気分になってしまうのだ。

摘まんだりしたらどうなるか、想像することさえ恐ろしい。

けれど、ハンディカメラを構えた香月が目をギラギラさせて太一を見つめている。

摘ままないわけにはいかない。

太一は恐る恐る右乳首に親指と人差し指を添えた。

両方同時に摘まむのは恐ろしかったのだ。

軽く摘まんでみた。

「んんっ！」

雁首を軽く扱かれたかのような快樂が太一を襲った。

信じられない。

太一が摘まんだのは亀頭であって、グロ魔羅ではない。

だというのに、グロ魔羅がダイレクトに快樂を享受したのだ。

乳首で感じてしまったことへの恐ろしさで、太一は右乳首から手を離した。

驚き、混乱する太一の顔を香月のハンディカメラが収める。

「続けたまえ、御堂くん」

香月が厳格な物言いで太一の背中を押す。

太一はもう一度、右乳首を摘まんだ。

「おあああ！」

乳首をいじっているのに、グロ魔羅を愛撫しているかのように気持ちがいい。

太一の脳が乳首で感じるという現実を受け止めきれずに混乱する。

けれど、太一は乳首から手を離さなかった。

乳首で感じるなんて、女の子みたいで情けない、という思いはあった。

オナニー動画を撮影していることを割り切れてはいないので、カメラを前にした痴態の披露への恥ずかしさもあった。

けれど、乳首の快感と、スケベファンで得られるであろう支援金は、太一のこうした心的抵抗を押しつけるには充分であった。

「おお、おほっ、うう、うひいいい」

太一は右乳首を捏ねながら淫らな声を上げ始めた。

全身をくねらせ、うっすらと汗をかきながら、淫猥な仕草で見る者を誘惑する。

爽やかな風貌の太一がオナニーをしているだけでも、覗き見の背徳感を得ることができるといのに、今度はチクニーなのだ。

性的にノーマルに見える太一が乳首で感じている姿は、太一が爽やかであるがゆえに、淫らさを助長させる。

太一のグロ魔羅がぬとぬと我慢汁を流しながら震えているその有様もまた、チクニーの快楽に目覚めた太一の淫らさの証明となった。

爽やかな顔を快楽に蕩かしながら右乳首をいじり続ける太一の頭の中は、チクニーの快楽で溢れそうになっている。

乳首で感じるなんて女の子みたい、だとか、オナニーを撮影するなんて恥ずかしい、だとか、そういう常識と良識に縛られた思いはすっかり消えてしまっている。

そんな快楽一色に染まった太一の頭の中に新たな思いがふと浮かんだ。

左の乳首もいじったらどうなってしまうだろうか。

普段の太一ならば、なかったことにしようとするだろう。

乳首で感じるということ自体が太一にとって、忌避すべきことなのだから。

けれど、今の太一は快楽に溺れている。

だから、快楽の従順な僕となった太一は、左乳首も摘まんだ。

「うほおおおおおおおおおおお」

太一が、爽やかな顔に相応しからぬ無様な喘ぎ声をあげた。

太一の脳は、新たな快楽を受け止めきれずに壊れそうになっていた。

右乳首だけでもグロ魔羅をいじられているかのような快楽を得ていたのだ。

そんな状態で左乳首もいじってしまえば、快楽は二倍になる。

混乱する太一の脳にとっては、両乳首をいじるチクニーは、本来ありえない、二本のグロ魔羅を同時に愛撫しているかのようなぶっ飛んだ快楽なのだ。

快楽に堪えきれず、太一がベッドに倒れこんだ。

シーツに快楽の波を無数に描きながら淫らな蠢きを繰り返す。

太一が腰を空中に突き上げだした。

無様な喘ぎ声をあげながら何度も何度も腰を空中に突き上げる。

その勢いで、太一のフル勃起グロ魔羅がぶるんぶるんと震える。

太一の金玉もぼろんぼろんと震えている。

空中を犯そうとするかのような太一の無様な腰振りダンスを六台の固定カメラが余すところなく収めていく。

太一の無様な腰振りダンスは、挿入できなかったオナホール、そして、女体への未練に満ちているかのようにであった。

香月のハンディカメラが、涎を垂らしながら蕩けている太一の顔を撮影する。

「ああ、イきそう……イきそう」

太一が、切なさが伝わる声で喘いだ。

無様な腰振りも激しさを増す。

「ああ、ふう、おあああ、うあああああ！」

太一が腰を思いっきり突き上げて甲高く喘いだ。

振り上げられたグロ魔羅が勢いよく生涯童貞汁を噴き出させた。

二回目の射精だというのに、量も勢いも一回目より多く、濃厚な男の臭いをさせながら生涯童貞汁が飛び散る。

射精を終え、力尽きた太一がぐでっとベッドに横たわった。

太一の顔や、胸板、腹筋や太ももには太一が放った生涯童貞汁がへばりついていて、

射精を終えた太一のグロ魔羅も、太一の腹筋の上に横たわっている。

それでも太一の両手は未練がましく乳首をつまんでいた。

どぷっとグロ魔羅の鈴口から残った生涯童貞汁が押し出される。

射精を終えた太一が潤んだ目で香月のハンディカメラを見た。

「チクニーの感想、聞かせてくれるかな？」

「きもちよすぎて、こわれるかとおもいました……」

生まれて初めてのチクニーの余韻で羞恥心が混乱していた太一が、己の心境を素直に語った。

「もう、チクニーしかできないかな？」

「きもちよすぎて、むりです……」

香月の質問に太一がぼんやりとした顔のまま答える。

「そうかい、可愛いね、御堂くん」

香月がにやりと笑った。

奥付

『爽やかDD太一くんのスケベファン ド 下』のサンプル

初出：2020年7月15日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep